

エレミヤ書 31 : 20

ルカによる福音書 15 : 11～32

「放蕩息子」

<15章のテーマ>

今日のところは、聖書の中でもとても有名な「放蕩息子」のたとえ話です。

しかし、ここには放蕩する息子だけでなく、もう一人の息子も登場します。放蕩し尽くして帰って来た弟を、父が大喜びで受け入れているのを見て、怒り狂っているお兄さんです。今日の小見出しは、「二人の息子」のたとえ、が正確なのかも知れません。

しかし本当は、このたとえ話が語りたいのは、この息子たちを愛する父親の姿です。

15章全体には三つのたとえ話が語られていて、それにはすべて一貫したテーマがあるのだと、先週にお話ししました。

1～7節までは、百匹の中から見失った一匹の羊を捜し回り、見つけ出して、喜んで帰って来る羊飼いのたとえ。二つ目は8～10節で、無くした一枚の銀貨を見つけて喜ぶ女のたとえ。つまり、失われたものを見出した者の喜び。これが、15章全体の中心テーマです。

今回も、失われた息子たちを自分の許に取り戻す、その父親の喜びの物語です。ですから、最もふさわしい小見出しは、「息子たちを愛する父親のたとえ」なのかも知れません。

さて、ここでイエスさまが語られる「失われたもの」とは、神さまから離れてしまった罪人、神さまの御許に在るべきなのに、そこから失われてしまった者。つまり、わたしたちのことです。そして、捜し回り、見つけ出し、周りの人々も巻き込んで大喜びする方が、父なる神さまであり、神さまに遣わされたイエスさまです。

今日のたとえも、この失われたものへの神さまの思い。失われたものを見出した時の神さまの喜びを、わたしたちに教えています。

しかし、これまでと違って、失われたものは「羊」や「銀貨」ではありません。「息子」という人格を持つ人間です。わたしたちは、まさに自分自身のこととして、自分と神さまとの関係の事として、この物語を聞くことが出来るのです。

<放蕩息子／財産分配と旅立ち>

この「息子たちを愛する父親のたとえ」はとても長くて盛沢山ですので、二回に分けて、今日は「放蕩する弟」の物語を辿って行きたいと思います。でも、これは怒れるお兄さんのたとえとセットであることを、忘れないでください。

では、たとえばこう始まります。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、

わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。」

弟が言う、「わたしが頂くことになっている財産の分け前」。これは、父親の死後に遺産として受け継ぐべき財産のことです。ここで弟は、父親が活着ている時に、あなたの遺産を下さい、と言ったのです。よく考えれば、とても無礼な、失礼な話です。父親に、「あなたが死んだことにして下さい。もう、あなたは要りませんから、あなたの財産だけ欲しいのです」と言っているようなものなのです。

ところが、続きに「それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。」とあります。

父親は、この下の息子の言うことを聞いてやり、当然きっちり分配しなければなりませんから、兄にも弟にも財産を分けてやったのです。

すると、下の息子は何日もたたないうちに、財産、つまり家畜やら何やらを、全部金に換えて、遠い国に旅立ってしまいました。後で彼は食べる物に困って、豚の世話の仕事をする場面が出て来ます。ユダヤ人は豚を食べませんから、この弟は、遠い異国の地にまで行ってしまったのだ、ということが分かります。

ここで思うのは、この下の息子は、父親の許で不自由さを感じていたのかも知れない、ということです。自分が父親の許にることが、束縛されているように、管理されているように思われた。自分の力で自由に生きたい。父親の支配から逃れて、自分の思い通りに、やりたいことをやって生きていきたい。そう思ったのかも知れません。

また父親も、下の息子が急に財産をくれと言ってきたら、そのようにどこかへ行ってしまいうかも知れない、ということは頭をよぎったのではないのでしょうか。でも、父親は財産を分けてやった。そして、下の息子は案の定出て行った。この父親は息子に甘すぎたのではないのでしょうか。

しかし、この父親は、その意味では本当に、息子を束縛するような、自分の意志に無理に従わせて管理するような父親ではなかった、ということです。財産を分けたとしても、下の息子が父親の許に、自分の自由な意志で留まり、父親と共に生きていくことを望んでくれるのではないかと、期待していたのだと思うのです。与えた財産も、自分の自由な意志で、良いことに用いてくれるのではないかと、期待して与えたのだと思うのです。

しかし、下の息子は、与えられた自由を正しく用いることが出来ませんでした。自分の望みのため、自分の欲望のための道を選び、また財産を、自分や他人をちゃんと生かすために用いるのではなく、「放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった」のです。

わたしたちもまた、神さまから自由を与えられています。神さまは、わたしたちをご自分のロボットのように、何でも「はい」と答えるようにはお造りになりませんでした。そうす

ることもお出来になったに違いありません。でも神さまは、わたしたちが神さまの呼びかけに、自分の自由な意志で、喜んで応え、自ら神さまと共にいることを選び、本当の愛の交わりを築くことが出来る者として、わたしたちをお造りになったのです。

しかし、わたしたちはその自由を、神さまを求める方向に用いることが出来ません。神さまの思いに応えるために、正しく用いることが出来ません。

いつも自分中心に歩むために、自分勝手に歩むために用いてしまうのです。それが「本当の自由」だと勘違いしている。そうして、神さまの期待を裏切り、悲しませ、また隣人を傷つけ、自分を滅びへと追い込むような歩みをしているのです。

<放蕩>

さて、14節にはこうあります。「何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。」

下の息子は、放蕩を尽くして、すっからかんになった挙句、その異国の地で飢饉に見舞われるという大変な状況になりました。食べるにも困り始めた。

「それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。」とあります。

最初に少し触れましたが、ユダヤ人は旧約聖書で禁じられているので、豚を食べることはありませんし、飼うこともありません。むしろ、汚れたものとして避けていたのです。その世話をすることになった。下の息子は、異国の地で、もうそこにしか居場所が無かったのです。しかも、だれも食べ物をくれない。誰かが心配したり、助けの手を伸ばしてくれるような、互いに助け合えるような、そんな人との交わりを築いて来なかったのです。

彼は、自分の生きたいように生きてきました。たくさんのお金を持っていて、後でお兄さんのセリフに「あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして」とあるように、本当に自堕落な、快樂に身を任せたような日々を送ってきた。その時は充実していて、楽しかったかも知れません。これが自由だ、これが自分らしさだ、そう思ったかも知れません。しかし、そこには何も築かれなかった。財産や自由を、良いことのために、用いるべきことのために、用いなかった。そうして彼は、孤立していたのです。

<我に返る>

どうしようもなくなった時。17節にはこうあります。「そこで、彼は我に返って言った。」
「彼は我に返った」。これは、ギリシア語では、自分自身に帰って来る、という意味です。本来の自分自身の姿に気付いた。自分がどういう者であったかに気付いた、ということです。

彼が、自分についてどういうことに気付いたかということ、それはまず、自分は父親の許で

豊かに与えられていた、豊かな恵みの中に置かれていた、ということです。

「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」父のところでは、雇人にさえ有り余るほどパンがある。それなら、息子であった自分には、いったいどれほど豊かなパンがあったことでしょうか。

そこで与えられていた。そこで生かされていた。しかし、その恵まれていたことに感謝もせず、ありがたいこととも思わず、彼は自分でそこを捨てて来てしまったのです。

そして、今の飢え渴き、苦しみの状況に陥っている。友を得ることも出来ず、独りぼっちで飢えているのです。

そして、彼は言うのです。「ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。」

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」

彼が我に返って、もう一つ、自分自身について気付いたことは、罪を犯した、ということです。与えられていたものを感謝もせず当然と思い、そして自分の力で何でもできると思っていた。父親が要らないとさえ思った。自分勝手に歩むことが、自由に生きること、幸せなことだと思っていた。そして、自分のことを愛し、すべてを与え、支えてくれていた人を、自ら捨てて、離れて行った。この、自分の罪の姿に気付いたのです。

そして、彼は父のところに行こう、と思うのです。そして、そこでの口上を考えます。

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」

父親を死んだことにして財産をもらい、それを使い果たして帰るのですから、「息子と呼ばれる資格はありません」というのは当然のセリフでしょう。下の息子は、こうして今の自分の立場を一応弁えていました。

そして、雇い人の一人にしてください、と言う事にした。とにかく、パンが食べたいのですから、もうそのためなら雇人でも何でもやろう、と決めたのです。

しかしこれは、父親に赦してもらうにあたって、何か深く反省し、強い意志をもって決断をした、というような立派なものではありません。もう、そう言って父親の許に帰る他に、彼は生きる道がなかったのです。

自分が悪かったことは認めざるを得ないから、とにかくそれを正直に言って、何とか憐れみと赦しを乞い、せめてパンだけは頂けるようにしよう。そういう、立派でも何でもない、誰でも考えるようなことなのです。

<走り寄る父親>

そして、20節です。「そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。」

下の息子は父親の許に帰って行きました。もうそこにしか行き先がないからです。

ろくに食わず、異国の地からはるばる帰ってきた下の息子は、さぞかしボロボロだったことでしょう。でも彼は、父親に言うべきセリフを、何度も何度も繰り返しながら、帰ってきたのではないのでしょうか。

しかし、彼が父親の許に帰り着く前に、父親の方が家から飛び出して来たのです。

「ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」

遠く離れていたのに、父親は息子を見つけたのです。それは、毎日毎日、父親が息子の姿を探していた、ということです。もし息子が帰って来るなら通るはずの道を、いつも見つめ、その姿を探していた。帰って来るのをずっと待っていた。だから、どれだけ遠く離れていても、父親は自分の息子の姿を、すぐに見つけることが出来ました。

そして、もう居ても立ってもいられず、憐れに思い、走り寄って、首を抱き、接吻した。息子の姿を見て、その一步一步さえ、もう待っていられなかった。この父親が、どれだけ下の息子の身を案じ、悲しみ、もだえるような思いだったかが伺えます。

今日の旧約聖書のエレミヤ書 31 : 20 は、ご自分の民に対する、わたしたちに対する、主なる神さまの思いが語られているところです。これは、新しい翻訳の「聖書協会共同訳」の方が、内容が伝わりやすいように思います。ちょっとその翻訳で読んでみます。

「エフライムは私の大事な子ではないのか。／あるいは喜びを与えてくれる子どもではないのか。／彼のことを語る度に、なおいっそう彼を思い出し／彼のために私のはらわたはもだえ／彼を憐れまずにはいられない（――主の仰せ）。」

私の大事な子。喜びを与えてくれる子ども。彼のために、私のはらわたはもだえる。憐れまずにはいられない。神さまは、わたしたちにこのように語りかけて下さいます。わたしたちのために、はらわたがもだえるような思いでおられる。神さまはそのようなお方であり、それがまさに、この父親の姿なのです。

<赦しと悔い改め>

どうしようもない放蕩息子が、罪人のわたしたちが、恵みを忘れ、自分で好き勝手している間も、探し続け、愛し続け、いつでも帰ってくるのを待っている。そして息子が帰ってきたら、迎えに出て行き、走り寄り、反省や後悔を何も言わない先から、抱きしめ、接吻する。接吻とは、赦し、受け入れていることの「しるし」です。

父親は、もう、赦しているのです。父親の方は、帰ってきたら、いつでも受け入れるつもりなのです。迎えに飛び出して行くほどに、息子を求めているのです。

そして、息子が、あの丸覚えした口上を言いかけると、それも最後まで聞かないのです。

21 節以下にはこうあります。「息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父

親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。』

「いちばん良い服」とは晴れ着を指す言葉で、これを雇人が着ることはありません。履物も奴隷にはありません。そして、手にはめられる指輪とは、この家の主人の権威を示すものであり、はめられた者が、確かにこの家の息子であることのしるしなのです

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」と言った息子を、父親は自分の大切な息子として迎え入れた、ということです。

この父親は、親バカすぎるのではないのでしょうか。息子を溺愛しすぎているのではないのでしょうか。しかし、この父親のような、わたしたちの思いを遥かに超えた愛情を、神さまは罪人のわたしたちに向けて下さっている、ということなのです。

そしてむしろ、これだけの非常識なほどの愛情を持つ方であれば、わたしたちが赦されることはないのです。神さまの恵みを忘れ、自分勝手に与えられたものを使い果たし、神さまから遠く離れて、自由なつもりで放蕩している。滅びへと向かっている。

でも神さまは、そんなわたしたちを、ひたすら待っておられる。いつでも赦すつもりで、いつでも受け入れるつもりで、わたしたちが帰ってくるのを、はらわたがもたえる思いで待っておられる。ここに、赦しがあるのです。ここに、悔い改めて立ち帰る場所があり、救いがあるのです。

わたしたちは、自分の罪を知って、悔い改めて、完璧にまともになって、立派になって帰るわけではありません。自分の「悔い改め」という立派な業によって、赦し与えられるのではないのです。

わたしたちは、神さまが赦しをもって迎えて下さる方だからこそ、罪を悔い改めることが出来るのです。神さまがこれほどまでに愛して下さる方だからこそ、この方の許に行こうと思うことが出来るのです。

下の息子も、もう仕方ない。父の許にしか自分の居場所がない。そのことにやっと気付いて、もう息子なんかじゃないと言われても、せめて雇人となってパンだけにでもありつけたら。そんな中途半端な悔い改めで、もしかしたら、表面的な悔い改めにしか過ぎないような状態で、すごすごと帰ってきただけなのです。

それでも、いい。父なる神さまは、わたしたちが不完全なことは、中途半端なことは十分承知です。それでも、わたしたちが、自分の居場所はここにしかないかも知れない、と気づき、神さまの方に心に向けたとき、もう走り寄り、抱きしめて、赦して下さるのです。

神さまの方から出て来られるくらいに、わたしたちを待っておられる。そして、愛する子どもとして、「大きな喜び」をもって迎えて下さるのです。

息子を迎えて、父親は言いました。「肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。」

息子が遠く離れていったことは、父親にとっては息子が死んでしまったような、大きな深い悲しみだったというのです。しかし、戻ってきたことは、その息子が生き返ったような、驚くべき、大きな、喜びだというのです。

「いなくなっていたのに見つかった」。失われた、大切な、愛するものを、見出した者の喜び。罪人であるわたしたちが、神さまの御許に立ち返った時の、神さまの喜びが、ここに語られているのです。

放蕩を尽くして帰ってきた息子を大喜びで迎える父親の姿は、罪を犯し、裏切り、離れて行った罪人に対する、神さまの非常識すぎるほどの深い愛を現しています。

その愛を、究極的にわたしたちにはっきりと示して下さったのが、神さまの独り子、イエスさまの十字架の死と復活です。わたしたちを救うために、神の御子がまことの人になられる。御自分の命を投げ出される。そして、復活して下さる。わたしたちを愛して下さるゆえに、赦すため、生かすため、そこまでのことをして下さる、神の御子のお姿です。

しかし、そのような愛で迎えられることによってしか、わたしたちが悔い改めて立ち帰る道はないのです。神さまの、このような、わたしたちの常識など遥かに超えた愛でなければ、罪人のわたしたちが、神の子として迎え入れられることはないのです。

この父なる神さまの、途方もない愛に頼って、受け止めていただくところにのみ、わたしたちの帰る場所、生きる場所があるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの計り知れない愛を、感謝いたします。わたしたちを愛する子どもとして、はらわたがもたえるほどに憐れんで下さり、走り寄って抱きしめるほどに受け入れて下さり、わたしたちが御許に帰ることを、どれほど喜んで下さる方であることを知らされました。

このあなたの愛と憐れみによって、わたしたちは赦しを得ることが出来、また本来自分が生きるべき場所に、あなたの御許に、帰っていくことが出来ます。

この神さまの愛と、救いを示して下さった、十字架と復活のイエスさまにあって、わたしたちを神の子として受け入れて下さい。あなたの喜びに与って生きる者として下さい。

日々、生かされている恵みを感謝して、あなたが共にいて下さる幸いと喜びを思って、歩んでいくことが出来るようにして下さい。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン